

ふくしま会議2014～ふくしまを耕す～

2014年10月11日(土)12日(日)、今年も「ふくしま会議」が開催された。「ふくしま会議」は2011年から毎年開催され、わかりにくい福島の現状を発信している。今年のテーマは、「ふくしまを耕す」だった。「～鍬を持ち鋤を構えて畝う」一年後の2015年にそれぞれの成果と思いをもち寄ることになった。

この会議のトークセッションに参加して、以下の言葉が心に響いた。「豊かな農地は豊かな人を育てていく場でもある」、「農民にとっての『土』、長い時間をかけて作っていく『土』、時間のつながりの中で、今を最も生きている人たちが農民ではないか」との発言。魂の話が深められていく中で、我々の文化は死者、動植物との共生の中に手繰り寄せられている文化であるという話。震災を体験した痛みを知っている人たちがより深くその文化を共有しているということ。痛みを知ったものが「福島から人を耕していく時期に来ている。耕し方を一緒に考える時期」であるとの言葉も私の心に刻まれた。それを「足元の水を掘る」ようにしていくのだろう。「足元を見失いつつある」との発言も大事にしたい。



また、今回の会議で「一般社団法人ふくしま会議」の代表理事である赤坂憲雄氏は、「蛇行する議論のはてに、わたしたちは『一般社団法人ふくしま会議』を立ち上げることにした。この法人は、『原子力に依存しない安全で持続的に発展可能な社会づくりを目指し、3.11以降の福島の経験と現実を世界と共有し、新しい福島を創ること』を目的とする。もはや、テーマは分断と対立を超えることではなく、新しい福島のイメージを創造し提示することだ、とわたしたちは感じている。」と述べている。

かーちゃんのカ プロジェクト

「ふくしま会議」が開催されたキッチンガーデンビルには「かーちゃんのカ プロジェクト」がお店「かーちゃんふるさと農園わいわい」を開いている。阿武隈地域から避難してきた「かーちゃんたち(女性農業者)」が知恵と技術を生かした農産加工品を作り「食と農を通じた自立と再生」を目指したプロジェクトだ。



福島にお訪ねの節はぜひ立ち寄って欲しい。レストランもしているし、コーヒープレイクも可能。

後世へ継承を誓い新た

震災・原発(核)事故から3年半、各地で地域のお祭りが盛んだ。避難で地域がばらばらになり、伝統芸能の継承も危ぶまれる中、10月4日(土)5日(日)に福島「四季の里」で「ふるさとの祭り2014」が行われた。それは「福島からはじめよう。『地域のたから』伝統芸能承継事業」によって開催され、震災からの心の復興を目指していた。

20の地域伝統の踊りが披露され、ブースでは、伝統芸能の体験コーナーが催され、ふるさとご当地グルメコーナーも並んでいた。伝統工芸品の創作体験コーナーの「起き上がり小法師の絵付け」には子どもたちの行列が出来ていた。

エイサーと一緒に大漁旗の豪快な旗回し（大漁旗エイサー？）に、訪れた人は釘付けになっていた。

飯舘村の「小宮の田植え踊り」は 26 日に 20 年ぶりに北海道小樽市で開催される北海道・東北ブロック民族芸大会で福島県代表として上演された。原発（核）事故からの復興をと、踊り手たちは全村避難となった古里の再生を願って踊った。1783 年の凶作を機に、豊作祈願として行われるようになったものという。それを小中学生に伝承していくはずだったが、子どもが減ったために中断していた。それを「踊りを通して村民に元気を与えたい」と踊り継ぐことを再開したのだ。



“おやじのサケ帰る”

「福島民報」2014.10.12 に、3 年 7 か月経って父を思う息子の気持ちがひしひしと伝わってくる記事があった。福島第一原発事故の避難区域内、富岡町の富岡川はサケを放流し、サケが戻ってくる川だった。猪狩功さんはそこでサケ繁殖漁業組合長をしていた。が、あの日、稚魚 70 万匹を酸素不足から守るために、停電したからと発電機を持って稚魚を助けに行った。

息子さんたちは避難を強いられ、故郷の地を踏むことを禁じられていた。父親を探しに帰ることが出来たのは 2 年後。しかし未だに何の手がかりもないという。あれから 3 年 7 か月、サケが富岡川に帰ってきた。「震災の年に海さ行ったサケだ」「おやじが自分の子どもよりかわいがっていたサケだ」と顔をほころばせた。そのサケは中学生のころに父から教わった方法で 30 年ぶりに投げた網に銀色に輝いてかかったものだった。帰って来たサケに息子は確かに父を見たのだろう。

「お念仏」

伝統行事として浪江町で行われていた「お念仏」が、3 年 7 か月経った 2014 年 10 月 17 日に震災後初めて催されたとの記事に接し、心にぽっと灯がともったように感じた。大きなお数珠を手に取り、複数の人が輪になって座り、かねの音に合わせて「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えながらお数珠を回していくものだ。それは、地区での葬儀などで死者を弔う際にも行われていたものだという。福島第一原発事故の避難区域に指定され避難を強いられ、ばらばらになった人々が、「お念仏をいつか再開しよう」とお数珠とかねを持ち回りで保管していたという。日中の帰宅が許可されるようになり、念願の「お念仏」に 13 人が参加した。一つのお数珠を皆で手にして唱えた「お念仏」にどんな想いが込められていたのだろうか。「お念仏」を無心に唱える一人一人の心はきっと復活への道を歩んだことだろう。

災害公営住宅「希望せず」増加

完成遅れなどの影響なのだろうか、福島第一原発事故で全住民が避難を強いられている富岡町、浪江町の住民意向調査では「入居を希望しない」が富岡町で 54.6%、浪江町 46.3%との調査結果が出たと福島民報（2014.10.18）が報じていた。それは 2013.8 の調査に比べると、富岡で 13.5 ポイント、浪江で 11.5 ポイント増えていることになる。